**２０２２年度　日本財団助成**

**困難を抱える子ども・若者とその家族を地域で**

**支える当事者中心のアプローチの実装　報告書**

**一般社団法人　ALLOUND**



**Ⅰ．2022年度のラップアラウンド日本実装への取り組みを振り返って**

　困難を抱える子ども・若者とその家族をサポートする当事者主体・地域基盤のアプローチであるラップアラウンドを日本で実装をめざして活動を行ってきた。2022年度は以下の取り組みを実施した。

1. ケアコーディネーター養成研修受講者の対話会の継
2. 米国養成団体En route からのコンサルテーション　5回
3. 奈良市、堺市におけるラップアラウンドのモデル実装の継続
4. ラップアラウンドミーティングのロールプレイワークショップの開催

以上、4点について概要を記す。

1. ケアコーディネーター養成研修受講者の対話会の継続

ラップアラウンドのケアコーディネーター養成研修受講者の対話会をオンラインで12回開催した。時間は2時間程度で、各回、主なテーマは設定したが、ラップアラウンドの理念がどのように現場でいかせるのかについて、さまざまな角度からの意見やアイデアを参加者同士が活発に対話する時間であった。

表１．2022年度ケアコーディネーター養成研修受講者対話会

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 　　　開催日 | 主な対話会のテーマ |
| １ | 2022年4月16日 | ラップアラウンド養成研修受講者のアンケート分析の振り返り |
| ２ | 2022年5月28日 | 日本におけるラップアラウンドの適応可能事例について |
| ３ | 2022年6月19日 | 日本子ども家庭福祉学会での発表についての報告 |
| ４ | 2022年7月23日 | 奈良市の実装状況についての発表 |
| ５ | 2022年８月20日 | 特別企画　フランスの子育て支援について学ぶ |
| ６ | 2022年9月24日 | 日本実装を妨げるものについて検討 |
| ７ | 2022年10月15日 | ラップアラウンドミーティングロールプレイ研修会開催の企画検討 |
| ８ | 2022年11月23日 | 田原真人さん・佐野浩子さんからプロセスワーク概念、対立状況のファシリテーションについて学ぶ |
| ９ | 2022年12月18日 | 千葉県里親応援ミーティングプラスについての紹介 |
| 10 | 2023年2月12日 | 1月ワークショップ振り返り　第1回 |
| 11 | 2023年２月19日 | 1月ワークショップ振り返り　第２回 |
| 12 | 2023年3月25日 | 今年度のふりかえりと来年度に向けて |

ラップアラウンドのケアコーディネーター養成研修受講者から見たラップアラウンドの強みをまとめると以下のようになった。

　図１．養成研修受講者から見たラップアラウンドの強み



対話会では、モデル自治体の奈良市・堺市だけでなく、千葉県においても里親応援ミーティングにラップアラウンドの理念を取り入れる取り組みが始まったことなどが報告された。

このように強みがあふれるラップアラウンドであるが、実装への障壁も数多く出された。例えばオーダーメイドの支援が難しいという日本の法制度の課題、ファシリテートの難しさ、当事者を中心にするために具体的にはどう進めていくのか、ピアサポーターの発掘、ピアサポーターとの協働の難しさ、ファシリテート力をどう向上するのか、ラップアラウンドをするための時間や人員や予算の不足などが出された。ラップアラウンドを広げていくためにはこの障壁を超える仕掛けを考える必要がある。

そのひとつとして、架空事例を設定し、役になりきり、ラップアラウンドミーティングを開催してみてはどうかという案が対話会参加者から出され、当初の計画に加えて、ロールプレイを主としたワークショップ企画に向けて取り組みを行ない、開催後には、ワークショップの振り返りを行った。

２．米国養成団体En route からのコンサルテーション　5回

以下のとおり、米国養成団体　En routeからのコンサルテーションを5回開催した。

表２　コンサルテーション一覧

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 　開催日 | 　概要 |
| １ | 2022年7月27日 | 堺市子ども相談所事例についてのコンサルテーション |
| ２ | 2022年9月20日 | 奈良市こどもセンター事例についてのコンサルテーション |
| ３ | 2022年11月9日 | En routeのケアコーディネーターへの聞き取り⓵ |
| ４ | 2022年12月７日 | 同上　② |
| ５ | 2023年1月31日 | 来年度に向けてのコンサルテーション |

モデル実装自治体における具体的な実装事例の相談に加え、豊富なケアコーディネーター経験を持つスタッフからケアコーディネーターとしての経験を聞き取る機会を持った。、そのなかで、米国でも最初から今の形になったわけではない。３０年かかっている。できるところから始める。ラップアラウンドを理解してもらう活動を続けるという助言により、フルバージョンでの実装ではなくても、できるところから始めることの大事さを学んだ。

　また米国と日本では法制度や文化、社会状況など異なる点が多く、米国ラップアラウンドを日本に合わせた形を構築していく必要性を改めて実感した。

３，奈良市、堺市におけるラップアラウンドのモデル実装の継続

モデル実装自治体である奈良市・堺市において、ラップアラウンド実装の取り組みを継続してきた。両自治体におけるラップアラウンドについての研修、事例検討などに加え、実際の事例にラップアラウンドの導入をはかってきた。２つの自治体の職員は上記のEn routeからのコンサルテーションを受け、当該事例へかかわった。以下は、両自治体からの実践報告である。

〇奈良市子どもセンターからの報告

実践報告「地域ネットワークを活かした当事者主体の支援を目指して」

奈良市こどもセンター子ども支援課

岡本あい

奈良市は、2022年４月に地域子育て支援センター・子ども家庭総合支援拠点・児童相談所・一時保護所等を含む複合施設「奈良市子どもセンター」を開設した。これまで子ども家庭総合支援拠点として多機関連携や地域資源の活用等に取り組む中、昨年度はラップアラウンドの理念に基づく支援の実装を行ってきた。今年度からは子ども家庭総合支援拠点と児童相談所が一体の組織となり、基礎自治体が児童相談所を持つメリットを活かす手段としてラップアラウンドが有効だと考え、研修会や事例検討会、実装事例を通して、ラップアラウンドの理念に基づく支援が展開できるよう取り組んでいる。また、これまで以上に地域ネットワークを活用した支援が展開できるよう、奈良市社会福祉協議会とも連携の機会を重ね、研修会や事例検討会の参加を進め、地域の社会資源を活用した支援の模索を行っている。これまでの子ども家庭総合支援拠点で行ってきた在宅支援ケースはもちろんのこと、虐待相談や非行相談、家族再統合等、児童相談所が担当する困難な事例ほど、多職種連携や地域の支援が必要だと感じている。あらゆる社会資源を発掘して多機関連携のコーディネートを行い、子どもと家族の強みに焦点を当てたオーダーメイドの支援を展開していきたいと考え取り組んでいる。

奈良市では、一時保護所の開設に伴い、子どもの権利擁護や意見表明支援（子どもアドボケイト）にも取り組んでいるが、ラップアラウンドでは、あらゆる場面で子どもの意見を最大限に引き出すことを重視しており、子どもの権利擁護を推進していく手段にもなると考えている。

今年度の具体的な取り組みとしては、家族再統合の事例で実装をはじめ、担当者とラップアラウンドマインドについて共有し、米国の養成団体のコンサルテーションを受けて支援を進めてきた。ラップアラウンドの視点を入れることで、リスクは押さえつつも、家族の強みに焦点を当てて関わり、そのことがより多くの家族の強みを引き出し、当事者主体の支援につながっていると感じている。また、奈良市社会福祉協議会と共に事例検討会（2022年11月３０日、2023年2月22日）を実施したり、ラップアラウンドのワークショップに共に参加することで、ラップアラウンドの理念を共有することができた。社協が主催する子ども若者支援におけるボランティア養成講座にも参加し、支援の担い手を増やす活動についても共に取り組んできた。

地域の中で子どもが安心して暮らすためには公的な支援者だけでは限界があるため、地域の中で子どもや家族の助けになる存在、伴走してくれる存在、つながり続けてくれる存在、安心できる居場所、強みを発揮できる居場所をみつけていくことが必要だと考えている。そのためには、奈良市社会福祉協議会を中心とする地域との連携は必要不可欠であり、地域の社会資源を活用した支援の在り方や、当事者主体の支援を一緒に模索している。ラップアラウンドのフルバージョンでの導入には時間がかかるだろうが、このような様々な取り組みを通して、あらゆる場面でラップアラウンドマインドの支援が展開されつつあると考えている。

奈良市は、新しい児童福祉機関としての模索が始まったところではあるが、児童相談所と子ども家庭総合支援拠点が一体となって機能していることで、専門的な診断・指導・支援を行いつつ、地域のネットワークを活かし、インフォーマルを含む様々な支援者と協働して当事者主体の支援を実現させていきたいと考えている。そのためにも、ラップアラウンドの理念に基づく支援が展開できるよう、引き続き市社会福祉協議会とも連携して取り組んでいきたいと考えている。

〇堺市子ども相談所からの報告

　実践報告「ラップアラウンドの｢ウチ｣と｢ソト｣」

堺市子ども相談所　　北谷多樹子

１）ラップアラウンドとの出会い

　ラップアラウンド導入以前から堺市子ども相談所の保護者支援のための外部カウンセラーとして活動していただいていた久保氏から、アメリカにおけるラップアラウンド養成団体のひとつであるEn routeのスタッフによるケアコーディネーター養成研修にお誘いいただいたのは、2021年1月だった。

　それまでも、久保氏によるラップアラウンド紹介の研修には参加したことがあり、ラップアラウンドの概要について、知っているつもりであった。しかし、当時の筆者は｢ラップアラウンドと、これまでも当所で積極的に取り組んできていた家族応援会議とは、それほど大きく違わないのではないか｣と考えていた。

しかし、養成研修を受講し、実際のケース支援に取り組む中で、ラップアラウンドと家族応援会議はまったく別のものであることが理解できた。また同時に、自分のこれまでの支援の組み立て方がいかにパターナリズム的であったかと痛感するとともに、ラップアラウンドの10の原則が、対人援助職としてのあり方の、強くしなやかな背骨となったような感覚になっている。

　ここでは、ラップアラウンドの｢ウチ｣をクライエント、｢ソト｣を支援者自身や組織について、それぞれに起こってきた変化について報告する。

｣

２）｢ウチ｣の変化

　ラップアラウンドの10の原則の1番目に「家族の声と選択(家族主導、若者の支持にもとづく)」がある。これは、「家族を自分たちの人生の運転席から降ろさない」ということである。

　ラップアラウンドを学び始めてから、筆者は自分が支援に関わる家族や子どもたちに｢どのような家族になっていきたいか｣というビジョンを尋ねるようにしている。しかし、多くの家族や子どもたちは、この質問にうまく答えられない。これまで、家族や子どもたちが聞かれたことのない質問だからである。自分自身のことであっても、質問されたり考えたりした経験がなければ、意識することがないため、すぐに答えることは難しい。また、家族のことについても、家族から直接聞いたり、会話などで話題にしたりすることがなかった場合、たとえ生活を共にしていたとしても、知らないことのほうが多いだろう。

　ラップアラウンドの初期に家族がパートナーとともに作る｢家族のノート｣は、シートを作成する段階ではそれぞれが｢自分自身の価値観｣を整理し、家族と共有する段階では｢家族の価値観｣に触れる体験となる。しかし、こうした心の中を探索する取り組みは、その人の逆境体験やトラウマに触れ、心理的な負荷が非常に大きくなることもある。そこで重要なのが、パートナーたちの存在である。自分たち家族の将来のビジョンを実現するという目的が大前提ではあるが、大人も子どもも、それぞれのパートナーの存在を命綱にして、過去のトラウマティックな体験や自分の価値観に向き合うことができる。

このようにして、少しずつ家族は｢中のものを外に出して他者と共有する｣作業に慣れていき、最近では、家族のほうからチームミーティングのテーマや内容について希望が出るほどに取り組み姿勢が｢自分事｣となり、かなりスムーズに意見を伝えることができるようになってきている。

３）｢ソト｣の変化

　外部の研修などでラップアラウンドの話をすると、｢とても良い取り組みだと思いますが、実際にするとなると、ちょっと大変ですよね｣といった抵抗感が出ることが多い。それは、私たちの取り組みの中でも同じだった。ひとつは、｢対話｣についてである。私たちは、特定のテーマや内容、支援の方向性について、クライエントから聴取したり、説明したりすることには慣れているが、実は、オープンに、かつ探索的にクライエントと話すことには慣れていなかった。ラップアラウンドでは、家族のビジョンや、その実現のためにチームミーティングで取り扱う内容は、基本的に家族が決める。もちろん、法的な責任を負う児童相談所の担当者は自らの使命を全うするための発言を行うが、それでも、児童相談所のニーズをクリアする方法は、家族がそれぞれのパートナーとともにアイデアを出し合って決める。これは、10の原則の４番目｢コラボレーション｣なのだが、コラボレーションの元々の意味が｢共同制作、共同事業、共同研究、協業、合作｣であるように、支援者とクライエントは完全に対等の立場である。そしてこの、｢完全に対等な関係性｣や｢面接やチームミーティングの結末を事前に想定できない｣といった対等性や不確実性は、予想以上に支援者の不安や恐れを喚起したし、同時に無意識のレベルにまでパターナリズムがしみこんでいることに直面し、動揺した。

　しかし、そこはチームで取り組む力である。初めての取り組みということもあり、こうした不安や混乱、困惑が起こってきた時にも、児童相談所内の担当者間で出し合って共有した。そして共有する中で、｢それがラップアラウンドなのか｣という学びに変換し乗り切ることができた。すると、不思議なことに、支援者チームの中に｢ネガティブなことでも、正解でなくても発言してよいのだ｣という安心感が醸成され、それぞれが自由に意見を出せるようになった。その結果、それぞれのポテンシャルを十分に発揮した議論が行われ、さまざまな局面を乗り越えることでき、さらにチームの結束力が強くなっていった。なんと、クライエントだけでなく、支援者側のモチベーションも上がっていったのである。

４）ラップアラウンドのメガネをかける

　ラップアラウンドをフルセットで実施しようとすると、家族それぞれにパートナーを付け、意見表明の練習を丁寧に行い、チームミーティングの段取りをし…と、かなり大がかりな作業が必要となる。しかし、10の原則をベースにした支援を日々の支援業務の中に織り込んでいくこと、いわば｢ラップアラウンドのメガネをかけて｣支援を行うことは、個人の考え方ひとつのため、今日の今からでもできる。

　ラップアラウンドにかぎらず、新しい支援の方法論を学んだ時、次に課題になるのはその伝達や普及である。筆者の所属でも、最低でも年1回は全体研修を行い、ラップアラウンドを導入するクライエントやその家族に関わる担当者に対しては、チームに対して個別に研修を実施しているが、こうした、いわゆる“トップダウンの”研修には限界がある。そこで筆者は｢ラップアラウンドのメガネをかけた｣支援を個別に行いつつ、家族と合同で面接を行う際などにファシリテーター役を担うことで、ペアになって動く福祉司や、きょうだいを担当する心理司に、ラップアラウンド的支援の体験と解説を行うといった“ボトムアップ”の普及作戦を行っている。レストランの紹介サイトでユーザーレビューが重要視されるように、こうしたOJT的な体験によってラップアラウンドの高評価レビューの数を増やし、いつか、行列のできる人気店になることが、今の筆者のゴールとなっている。

４．ラップアラウンドミーティングのロールプレイワークショップの開催

　ケアコーディネーター養成研修受講者の対話会の中で、ラップアラウンド実装へのハードルを越えるための方策として、ラップアラウンドミーティングのロールプレイを体験するワークショップ開催のアイデアが生まれた。受講者と準備を重ね、以下のように開催した。

１）開催概要

　日時：2023年1月14日（土）・15日（土）　2日間

　場所：キャンパスプラザ京都　（京都市）

　参加者：ケアコーディネーター養成研修受講者（７名）とその受講者が次に伝えたいと考える推薦者（12名）　合計　29名

　　　参加者29名内訳

児童相談所　16名　市町村子ども相談対応課　4名　民間支援団体　４名

　　　　児童家庭支援センター1名　児童福祉機関　1名　社会福祉協議会　2名

　　　　研修機関　1名

ファシリテーター3名　運営スタッフ、アドバイザー2名

　目的：予期しない妊娠をしたと思われる若年妊婦の架空事例をとおして、ラップアラウンドミーティングのロールプレイを行い、ラップアラウンドを体感し、理解を促進する。

　２）ワークショップの内容

〇事前学習　　以下の3本の動画を参加者に送り、視聴したうえで参加を

　　依頼した。

　　　　　ラップアラウンドの基礎理解動画

　　　　　田原真人さん作成のラップアランドの必要性についての全体理解の動画

　　　　　En routeが作成したラップアラウンドミーティングの模擬ビデオ

　　　　〇ワークショップ1日目

このワークショップのねらいについての説明

参加者による自己紹介

模擬事例の説明

グループ分け（当事者・ナチュラルサポーターグループ、支援機関グループ、ラップアラウンド関係者チーム）

各グループに養成研修受講者を配置、グループ内のファシリテーションを行う

グループの中での配役決定

従来の方式での関係者の会議を開催する。公的支援機関グループは会議の進め

方についてグループでの話し合い。

そのミーティングのロールプレイ、当事者役割がそれを見る設定を行う

1日目のワークショップをとおしてアドバイザーの田原氏・佐野氏の対談

　　　　〇懇親会

　　　　　参加者交流、奈良市・堺市での実践報告

　　　　〇ワークショップ2日目

　　　　　その後の経過についての模擬事例を使った説明

ラップアラウンド導入でのミーティング準備の話し合い

ラップアラウンドミーティング　その１

ラップアラウンドミーティング　その２

アドバイザー参加の田原真人さん、佐野浩子さんからのコメント

佐野さんのファシリテートでラップアラウンドを現場に導入するにあたっての促進力と抵抗力についての話し合い

　　　３）ワークショップ参加者の事後アンケート結果　　（回答者　26名）

　　　　〇ワークショップ1日目

a.満足度　5段階

　　　　　５　１９名　　　４　７名　　　３　０名　　　２　0名　　　１　０名

　　　　b.よかったところ（自由記載からの抜粋）

　　　 ・安心して参加できる場づくり・チームの意味

　　　 「各テーブルに、養成研修受講者の方がいてファシリテーターをしてくれたので、安心して参加できた」「既にラップアラウンドを実践している人たちと初めてラップアラウンドに触れる人々が同じ立場で参加していたこと」「それぞれの役に対する人物像について、コミュニケーションをとりながら真剣に話し合うことができた」「体験を個人体験としてだけでなくグループ体験として、重層的に感じられるような感覚があり、体感的な理解の深まりも得られたのが心地よかった」

　　 ・多職種・多機関のメンバー参加のロールプレイ研修という形の持つ意味

　　　　「多機関・団体が参加してロールプレイを行うことは初めての体験かもしれない。

自分の立ち位置は何かを考える機会となり、当事者の置かれている立場を実感で

きた」「多職種・多機関の方と知り合う機会ができたことが面白かった。それぞれ

の立場で感じている思いや大事にしていることがありつつ、当事者主体での実践をしていきたいという共通の思いがあることが、面白いことが生まれそうな雰囲気を感じられた」

　 　・ロールプレイの効果

　　 　「実際にロールをしてその場の空気感を感じることは、インパクトがあった」

　　　 「関係機関のみのカンファレンスのロールプレイングがあったが、それを当事者目線で見て、コメントするという今までやったことのないことができてよかった」

　　　 「ロールプレイに関して、設定の中に当事者の想いや物語も表現されていたことで役割に入りやすかった」

　　 　「いつもと違う会議の様子やリフレクションでの当事者家族の意見を聞いて、その思いや受け止め方の違いがわかって良かった」

　　〇2日目

　a.満足度　5段階

　　　５　　１８名　　　４　　８名　　　３　０名　　　２　０名　　　１　　０名

　　b.よかったところ（自由記載からの抜粋）

　　　・ロールプレイを通しての理解の深まり

　　　　「すべての人がロールを演じたこと。また、ロールを演じることで当事者の目線に

立とうとした（その人の人生に降りていく感覚）こと、そしてそれを客観的にリ

フレクションしたことがよかった」「それぞれの役割によって感じたことや考えたことが違うのは当然のことで、それを共有できたことがとてもよかった」

　　　　「ロールを実践することで、場の雰囲気、当事者の緊張感、それに寄り添う各応援者のミーティングに対する姿勢を肌で感じることができた」

　　　・チームビルディングの深まり・チームの力を体感

「当事者の気持ちを傾聴するメンバーが集まると、メンバー同士のストレスを感じず、チーム感を感じることができた」「同じ内容、同じ目的であっても2日目と1日目とは違う会議になった。ケアコーディ―ネーターやピアサポーターなどのチームが、その日の会議の達成目標を十分に共有しておくことが大切だと感じた。特に最初の会議は、参加者全てが「チーム」であると感じられるように安心の場を作ることだと感じた」「グループでの話し合いがとても面白く楽しかった。自分たちがチームとして会議を実際にするとしたら、どこに重きを置くか、どこに目標設定するか、あるいはこういう事例の場合にはこういう雰囲気にした方がいいとか、会議の導入に何を取り入れるかなど、とても詳細に話し合ったり悩んだりした。こんなふうにチームで話し合って会議を進められるということが安心感につながり、その話し合いの場自体がとても前向きな場に感じた」

　　・ピアサポーターの役割の理解

　　　「ピアサポーターの役割は、事前学習の段階では“いた方がいいだろうな”ぐらいの理

解でしかなかったが、必須なのだということを目撃したような気がした」

　　・やり方ではなく、あり方（ラップアラウンド原則の重要性）

「従来の実践の課題をスパッと解決するわけではないが、これまでの支援の視点

という軸がぐるっと回りかけるような体験をした」「ロールプレイを2バージョン見られたことで、「このようにする」ということではなく、ラップアラウンドの10原則を念頭におきながら試行錯誤し、チームでつくりあげていくものなのだということを感じられた」「当事者を真ん中に置いたファシリテーションや、対立場面や葛藤場面を歓迎するメンタリティなどを学べた」「同じ事例でもケアコーディネーターによって進行が違って、色々な方法があること、それぞれに良いところがあって、当事者のペースというものも大切にしないといけないこと、沈黙をどうとらえるかなど、普段の面接の中でも関わる大切なことに気付かされた」

　　・理念を具現化するための流れ

　　　「事前学習で知的に理解していた部分が体験で裏打ちされた感覚があった」

「公的機関メンバーのロールとして、当事者を意識しながらどのような姿勢や言

葉遣いをしていくことが望まれるのかを意識しつつ、公的機関のミッションとして確かめたくなる内容や思考傾向の在りようについても意識し、必要な役作りや姿勢、展開のイメージを膨らませていく流れが面白かった」

c.ラップアラウンドの日本における必要性　5段階

　　　　５　１９名　　　４　６名　　３　１名　　　２　　０名　　１　0名

d.2日間を終えての気づき（自由記載からの抜粋）

・これまでの支援の振り返り・価値観の変化

「スキルや方法的な理解よりも、価値観の揺さぶりを受けた印象の2日間。がむしゃらに回数をこなして身体を鍛える筋トレでなく、身体の部位の動きや固さや、そこへの刺激の入れ方と反応を意識しながら、じっくり体幹を感じて身体を鍛えるトレーニングを重ねる時間を過ごした感覚だった」

「当事者支援には支援者側の心構えを変化させることや、時間がかかることを理解した。また、児童相談所の対応がパターナリズムになりやすいことも改めて自覚した」

「関わっている子どもや保護者の顔が浮かんできて、自分が相手にどのような家族になりたいと思っているかと問うことができていただろうかと、日々の支援を振り返る機会にもなった」

「事前の不安が外部要因ではなく、自身の内的要因（自身の価値観や物のとらえ方、在り方）によって大きく変化する可能性に気付くことができた」

・ラップアラウンドについての深い理解の促進

「完全な形ではなくてもラップアラウンドマインドの導入からでも始めることもできる。できることから始めていきたい。ワークショップを通して当事者主体とする　ための準備は丁寧に十分に行う必要があることを改めて感じた」

「チームをどう作っていくかが大切。ケアコーデネイターがチームを作るために当事者と十分に話をし、意見を聞いていくこと、事前に参加者と十分に話をしておくことで会議も変わっていったと感じた」

「ラップアラウンドの10原則は決して目新しいものではないが、それを実践するのがどういうことか、実践するなかでどのようなことが起こってくるか。既に導入されている堺市や奈良市が目の前で展開してくれたので、自分の現場での実践を具体的にイメージすることができた」

「実際にロールプレイをするとなると、今まで思っていた方法とは全く違っており、当事者を運転席にするということの難しさや、視点の変化に戸惑ったが、その良さも実感できた」

「チーム形成には大変高いハードルがあるものの、ケアコーディネーターやピアサポーターが存在することで、必要な情報を本人の負担が限りなく少ない状況で把握・共有できる可能性に気付けた。またチームでアプローチすることの心強さを認識することができた。この点はチーム作りに対する高い動機付けを得た」

・できるところからまずは始める意欲の獲得

「先ずは、一部分でもラップアラウンドを用いた、ケース面接や会議を行い、実際に所員にみせることから始めたい」

　　　「事前動画を拝聴した段階では、「難しい」「実際にするのは大変」「今の職場で取り入れるのは壁が髙い」との思いが強かったが、すべてを実装するのは難しくとも、　マインドや部分的な導入であったとしても実践できる可能性があることに気付くことができた」

　　　「どうやって仲間を増やそうか、理解者を増やそうか、マイナスからのスタートだとしても理想と希望を感じている。5年、10年かかったとしても、利用者にとって有益なものだから、諦めずに取り組みたい」

「自分が感覚的に実施していたことを、多角的な視点で意味づけでき、実装への勇気がわいた」

「難しいことを否定せず、近道に頼らないこと。実践を重ねていくことに尽きることを再実感した」

・実装のしくみづくり

「ラップアラウンドチームは行政ではなくその役割だけを担う機関がある方がきっと色々進めやすいだろうなと改めて思った」

４）アンケートから見たロールプレイワークショップの成果

参加者の事後アンケートからは、ラップアラウンドミーティングのロールプレイワークショップに対する満足度はかなり高いものであった。役割になりきり、ラップアラウンド実装を行うためにチームでの事前準備ミーティングのロールプレイを行うことでラップアラウンドの原則についての理解が進んだ。また、自らの日常の実践を振り返る機会にもなったと書いている参加者は多かった。ほとんどの参加者がラップアラウンドは日本に必要であると考えていることがわかった。実装への意欲を高めることができた。

**Ⅱ．2023年度　ラップアラウンドケアコーディネーター養成プログラムの構成案作成**

 日本版ラップアラウンド（アロウンド）のケアコーディネーター養成研修を2023年度に開催するにあたり、米国の養成カリキュラムに加え、上記Ⅰの2022年度に実施した１から4の取り組みの結果を吟味し、日本に必要な内容を追加することにより、養成プログラム（案）を作り上げた。

１．ケアコーディネーター養成研修プログラムの構成

1)ケアコーディネーターの役割について

・ケアコーディネーターの定義の理解

「全体を把握、家族のニーズを引き出し、サービスと支援する人を家族に結びつける。ラップアラウンド 会議の進行役」

・ケアコーディネーターの働きの理解

「会議開始前までに参加者とやりとりを行い、会議の目的や原則についての理解を深める」

2)ケアコーディネーターに求められるコンピテンシーの理解

ケアコーディネーターに求められるのは、ラップアラウンド の10原則に基づき、当事者とその家族がより良い方向へとすすむことができるよう、ユースパートナーやファミリーパートナーとチームとして協働していく力である。

〇ラップアラウンドの１０原則について

⓵家族の声と選択（Family Voice and Choice)

福祉現場が持つパターナリズムから脱却し、若者/子ども/家族を中心に据えることができる力

②チームに基づく（Team Based)

様々な当事者/関係者と関係を築き、チームになれる力

③子どもと家族によって認められたメンバーで構成されたチームが基盤（Natural Support）

若者/子ども/家族、またナチュラルサポーターから信頼を得る力、関係性を育める

力

④チームが共同して計画を作成し、実行し、モニターを行う（Collaboration)

チーム内の様々な意見を聴きながら、まとめあげられる力

⑤異文化を理解して寄り添える力（Culturally Competent)

家族の文化(衣食住に関わる習慣)や家族の属するコミュニティの文化(宗教/民族的背景など)を最大限尊重し、関わる力

⑥個別性を大切にする（Individualized )

型に当てはめるのではなく、それぞれの家族やメンバーにあった形で進めていく柔軟性

⑦強みを重視した関わり（Strength Based）

常に家族や若者/子どもの強みに焦点をあて続けられる、ポジティブなマインドセット

⑧ラップアラウンド が必要ないというチームの合意に達するまで持続して支援を実施（Unconditional Care)

最終的なゴールまで粘り強く寄り添い続けられる力

⑨支援計画の結果を重視し、調整を繰り返す)（Outcome base）

支援計画は出来るだけ測定可能なものとし、支援者の主観に依らない者とする。またゴールに向かってクリエイティブに方法を見つけていける力

⑩コミュニティを重視する（community based)

子どもと家族が地域社会の中で安全に生活していく事を目指し、包括的で、応答性が高く、出来るだけ制限をかけずに関わっていくマインドセットを保てる力

3) 養成研修プログラムのゴール

　　ラップアラウンドのケアコーディネーターを養成するため、以下の研修を行う。その目的は、支援者が上記のコンピテンシーに基づき、ファシリテーションを行うために、以下の項目をプログラムのゴールとする。

〇自分の/対象者のトラウマを認識し、トラウマから生じる行動への理解と対処法があること(トラウマに関わる知識とセルフケア、セカンドトラウマを予防するためのチームサポートの形成)

〇養成研修プログラムでラップアラウンドの理解とケアコーディネーターの基礎的な姿勢、ファシリテーションの基礎的なスキルが身につき、自身の職場等でラップアラウンドを実践することができる。

〇養成研修プログラム受講で出会った仲間とチームを形成することで、ラップアラウンドを行っていく上でのサポートを得ることができ、コンピテンシーに基づきながら、相互にフィードバックをしながら質の高い実践を行える。

　養成研修プログラムは、これらのゴールに向かうため、次のような要素を学びの核として取り入れる。

 A.　　学び方に関わる学習

 B. チームを形成するための学び

 C. ラップアラウンドについての学び

 D.　　トラウマケアに関わるコンテンツ

 E. ファシリテーションについての学び

4) 養成研修プログラムの対象者

養成研修プログラムの対象者は、以下の要件に２つ以上当てはまる人とする。

Ａ．ラップアラウンド 実装モデル地域において、チームとしてラップアラウンドを協

働できる状態にあること

B. ラップアラウンドに強い関心を持ち、自身の現場で実践する意志があること。

C. 社会的養育の必要性を有する子どもに仕事として関わった経験が２年以上あり、

ラップアラウンドを知る関係者からの推薦が得られている。

(児童相談所、児童養護施設、児童支援を行うNPOなどの民間団体等での仕事経験)

5) 学び方の方法

養成研修プログラムは、多様な方式で学びを促進するため、以下の５つのタイプの方法で実施する。

対面によるワークショップ

対面によるレクチャー

オンラインのワークショップ

オンラインのレクチャー

動画の配信による講義受講

上記の構成に基づき、2023年は日本版ラップアラウンド（アロウンド）のケアコーディネーター養成研修を開催予定である。